Ｎｏ．２２９【２０１６年１０月７日配信】
進藤堰（担当：工藤）

こんにちは！　室長の工藤です。

「進藤堰（しんどうぜき）」というのをご存知でしょうか。

国語辞典で堰とは、「水を取り入れるために、川の流れを遮って造った構造物」とあって、ここでは川から水を引いて農業用水を確保するために造った施設と考えておきましょう。そして、「進藤」は先週もご紹介した進藤庄兵衛という人物です。つまり、進藤堰とは、「進藤庄兵衛が造った堰」を意味します。

さて、この進藤堰ですが、どこにあったのか判然としていません。私が聞き及んでいるところでもいくつかの説があるのですが、いずれも明確な根拠がありません。その意味では「なぞの進藤堰」といってもいいかもしれません。

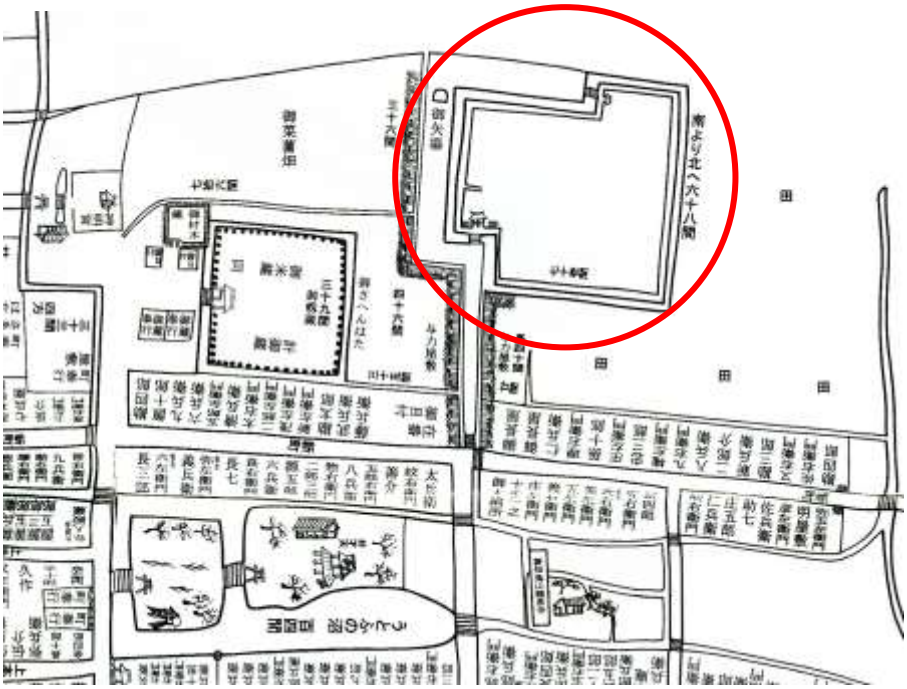
ところが、かつて見せていただいた進藤家の家伝史料を今一度読んでみたところ、堰に関する記事が散見していることに気がつきました。そのひとつが、庄兵衛のご子孫である進藤正直さんがまとめられた『本姓丹氏　進藤家の由緒と先祖の面影』（私家版　1941 年　市民図書館でも所蔵しています）に出ているのでご紹介しましょう。

「荒川の堰から新しい堰を通し、青森近郷の用水を成就した。そこで（青森惣鎮守の）毘沙門堂の側に観音堂を建立（再建）した」とあります。また、この本に出ていない箇所では、新堰は毘沙門堂付近まで引き、そこから東西に延びているとあります。ちなみに、毘沙門堂は現在の柳町通りにありました。

観音堂周辺（『新青森市史』資料編 4 付図「青森町絵図」〈貞享～元禄初年〉トレース）

開削の時期はこれらの史料には記されていませんが、観音堂の再建が延宝 7 年（1710）とされ、その前年に進藤は青森への常駐が命じられ外浜の御用（公務）を担います。ですから、堰の開削は延宝 6～7 年のことと考えられます。なお、翌延宝 8 年に彼は家老職を更迭され、政治・行政の一線から離れることになります。ですから、状況としてこの 2 年間としか考えられないのです。

もちろん、この堰が「進藤堰」名称で呼ばれたという証拠はありません。しかし、この記録が正しいものだとすれば、その蓋然性は高いとみています。ただ、当時の絵図を見てみても、この堰と確定できる水の流れがありません。とくに、毘沙門堂から東西に延びる水の流れに注目しているのですが、確かに東に流れるものはひとつあるのですが、西に延びるものは見当たりません。したがって、なお検討すべき課題は残されてはいます。



御仮屋周辺（『新青森市史』資料編 4 付図「青森町絵図」〈貞享～元禄初年〉トレース）
※赤い丸で示したのが御仮屋

進藤庄兵衛は青森町の建設に大きな功績を残した人物と評価されています。しかし、その「功績」の多くが明確な史料的根拠を持たないもので、過大評価と見られる向きもあります。そんな中で、「なぞの進藤堰」は彼の功績に光を当ててくれるかもしれません。